

いちじくを食べる手つきで
しんぞうを握るみたいに
あいしてほしい

うたた 岡山県

「あいしてほしい」に二重の比喩がかかっている。飢餓状態といつてもいいくらいに、愛されたい。いちじくを吃べるとき、人は握り混むように持つ。そうしないと溢れてしまうからだ。主体は心臓、ごと食べられたくて、捧げる替わりに愛されたいのだ。

夏雲へ電柱踏み分けゴジラ征く

つちや 東京都

侵略とは丁寧であるほど良い。踏み荒らすのは一瞬である違和感がありながらも、静かに丁寧に浸食され、気がついたら手遅れだった方が、ずっと恐ろしい。

ボールプールに魂の二つ三つ

檜野 美果子 宮城県

「まる」は優しい。容器がないと転がり溢れてしまう不安定さと、ぶつかっても痛くならない包容力がある。けれど、子ども達が夢中であそぶボールプールの中にある魂は、孤独だ。ずっとそこから出られない。

前髪の生えぎわ搔くと

くしゃみ出るよ

もうちょっと右

もうちょっと夜

塩本抄 石川県

「もうちょっと右」という誰もが想像できる言葉から「夜」の世界へ移行させるうまさ。生えぎわを搔いてて出るくしゃみが何処かへ繋がるスイッチなのだろう。繋がる何か

は、気が付いていないだけで日常に溢れている。

どの角度からも入ってくる雨が
遊んでほしいルルかもしねず

塩本抄 石川県

「遊んでほしいルル」で伝わってくる内容の濃さがおもしろい。おそらく昔飼っていた犬で、いつも無邪気に主体を遊びに誘っていたのだろう。今は形はないけれど、気配がある。いるのが感じられる。切ないが、死は別れではないことを主体はわかっている。

一生に一度おかしくなりましよう

平松 泥沸 兵庫県

一生に一度おかしくなつていらない人より、おかしくなつた人の方が深みがある。自分の狡さや愚かさの底を知れば、怖いものなんてないからだ。しかも誰かと一緒にならば尚更。「おかしくなりましよう」を差し伸べられた手は正しさばかりを説く手より美しい。

くちぶえや

はなうただつた頃のゆめ

池田 彩乃 青森県

「ゆめ」がゆめである前のとき、微かでやわらかく、たしかに人を癒すのにほとんどの人から忘れられてしまう。ゆめはそんな優しいところから生まれる。存在の重さを持つてしまった後は消えるのも苦しいのだ。生まれたての頃は、いつだつて懐かしい。

今朝は一つ結び

ねむると優しく離れてゆく

たんじょうび

森川 紗 福井県

眠ると次の日の朝がくるから、たしかに誕生日ではなくなる。言い方によつて誕生日からの距離についてこんなに柔らかく感じさせることができる。「たんじょうび」が小さな

猫のような、温かい生き物のように見えてくる。

思い出はブリーチして
しまっておく

だから

鮮やかに思い出せる

雨宮 慈
静岡県

思い出は、加工品だ。思い出す度に美しく加工しなおされ、最終的に本当とは違うものになっていく。けれど、もう触れられないのならばせめてうんと美しくしたい。主体はそれを知つていてブリーチしてしまっておく。鮮やさは、悲しさの裏返し。

夏の朝諦める度読経する

貴田 雄介
熊本県

諦める、とは目の前のものを手放すというより、そこを起点としたずっと先まで続く未来を諦めることだと感じる。けれど諦めることは今を生きることでもある。諦める度に読経する。何かの約束のような供養のような思いで。